厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（身体・知的等障害分野））
発達障害の原因、疫学に関する情報のデータベース構築のための研究

分担研究報告書

成人期の ADHD のアセスメント

研究分担者　内山　登紀夫　（大正大学　心理社会学部教授）
研究協力者　稲田尚子　（帝京大学文学部心理学科講師）

研究要旨：欧米と我が国で頻用される成人期の ADHD の診断・評価尺度についてレビューした。さらに ADHD の研究・臨床場面で使われる尺度の動向について英語、日本語のデータベースで検索し最近の動向を調査した。CAARS（Conners Adult ADHD Rating Scale：コナーズの成人期の ADHD 評価尺度, Conners et al, 1999）、CAADID ((Conners' Adult ADHD Diagnostic Interview For DSM-Ⅳ)、DIVA（Diagnostisch Interview Voor ADHD bij volwassenen：成人用 ADHD 診断面接）を中心に紹介し、CAARS が最も論文で使用されていた。CAARS、CARDID、DIVA をはじめとする成人の ADHD をアセスメントするツールの使用状況は、欧米と比して少ないことが明らかになった。しかしながら、最近 10 年の間に、我が国でも翻訳および標準化作業がようやくほぼ完了し、ようやく欧米と同等のアセスメントが実施できる段階となっている。

A. 概要と目的

注意欠如・多動症（Attention Deficit / Hyperactivity Disorder : ADHD）は，不注意, 多動性, 衝動性を主要な特徴とする発達障害である。我が国における ADHD の成人の有病率は 2.09%（内山ら, 2012）であり，まれな障害ではない。また，成人の ADHD は, 気分障害（38.3%），不安障害（47.1%），物質使用障害（15.2%）を高確率で併存している（Kessler ら，2006）など，問題は多岐にわたっている。児童期に ADHD と診断された人のうち，40～60%程度が成人期まで症状が持続し（Barkley, 1998; Barkley et al., 2002），なかでもとりわけ不注意症状は持続しやすい（Biederman et al., 2000）ことが知られている。また、成人期まで未診断で、成人期に初めて ADHD と診断されるケースも少なくなく、近年成人の ADHD に対する関心が高まっている。

本稿では、成人期の ADHD に対する診断・評価尺度およびそれらを使用した研究動向について述べ、この 10 年の進歩と課題について論じる。

B. 方法

欧米と我が国で頻用される成人期の ADHD の診断・評価尺度についてレビューした。さらに ADHD の研究・臨床場面で使われる尺度の動向について英語、日本語のデータベースで検索し最近の動向を調査し

た。

C. 研究結果

1. 代表的な診断・評価尺度

1) ASRS-v1.1（Adult ADHD Self-Report Scale：成人期の ADHD 自己記入式症状チェックリスト）は、成人期の ADHD のスクリーニングに使用される自己記入式の質問紙である。パート A の 6 項目とパート B の 12 項目の全 18 項目から成り、「全くない」、「めったにない」、「時々」、「頻繁」、「非常に頻繁」の 5 件法で評価する。スクリーニングに使用されるのはパート A であり、症状の頻度が ADHD を予測する鋭敏さは質問項目によって異なる。あらかじめ決められた回答の選択肢に 4 つ以上チェックがついている場合に、成人期の ADHD に該当する症状をもっている可能性が示唆され、さらなる診察やアセスメントを受ける必要がある。パート B は、対象者の症状に関するさらなる情報を得ることができ、診察やアセスメントの際に利用される。ASRSv1.1 の日本語版は、インターネット上に公開されており、無料で使用できる(http://www.let.ryukoku.ac.jp/~t-tak/PDF/18Q_Japanese_final_updated-1.pdf)。

2) CAARS（Conners Adult ADHD Rating Scale：コナーズの成人期の ADHD 評価尺度, Conners et al, 1999）は、ADHD の症状程度を評価する質問紙である。18 歳以上の成人を対象に，本人用と家族用の 2 種類があり，DSM-Ⅳ（APA, 1994）の診断基準を基に 8 下位尺度 66 項目の質問から構成されている。下位尺度は「不注意/記憶の問題」、「多動性/落ち着きのなさ」，「衝動性/情緒不安定性」，「自己概念の問題」，「DSM-Ⅳ不注意型症状」，「DSM-Ⅳ多動性−衝動性型症状」，「DSM-Ⅳ総合 ADHD 症状」，「ADHD 指標」の 8 つである。年齢帯別および男女別に標準化されており、T 得点で表される。得点が高いほど症状が重症であることを表しており，65 点以上が臨床域となる。利点はやはり簡便さにあるが, 本人用の場合，協力的か否かで回答に信頼性に差が生じる。その場合は, 矛盾指標で判断するようになっている。

3. CAADID（(Conners' Adult ADHD Diagnostic Interview For DSM-Ⅳ)は、成人期と小児期の両方における症状によって ADHD を診断できるように構成されている診断尺度である。成人の ADHD を診断する際には、現在の症状だけでなく、子どもの頃に ADHD の症状があったかどうか確認する必要があるためである。CAADID は、パート I とパート II に分かれており、パート I は、対象者の家庭・学校・職場での様子や、成育歴、既往歴などの生活歴について、「はい/いいえ」または自由記述で回答してもらう。「はい」(該当する）と回答した質問を中心に、臨床家は効率的に面接を進める。パートⅡは、「直接話しかけられたときにしばしば聞いていないようにみえる」、「しばしば毎日の活動を忘れてしまう」など成人期と小児期の両方において問題となる症状を臨床家との面接で回答してもらう。パート I とパート II の情報を総合して診断する。「障害」のレベルを特定する項目が設けられているため、この障害評定の定期的な利用により、対象者への治療効果を確認し、治療法の決定に役立てることができる。

3) DIVA（Diagnostisch Interview Voor

ADHD bij volwassenen：成人用 ADHD 診断面接）は、DSM-IV の診断基準に基づき、成人の ADHD に対する構造化面接としてオランダで J.J.S. Kooij と M.H. Francken によって開発された。小児期および成人期における ADHD の診断基準 18 項目それぞれの症状の有無と評価を簡易に行うことができる。面接項目としては、成人期と小児期の行動についてそれぞれ具体的かつ実際的な例が豊富に示されている。また、日常生活における 5 つの領域（仕事/教育、恋愛関係/家族関係、社会的交流、余暇/趣味、そして自信/自己イメージ）で見られる症状と通常関連づけられる機能障害として典型的なものを例として示している。過去の情報や周辺情報を同時に確認するために、成人の場合、可能であれば、DIVA をパートナー・家族同伴で実施する。DIVA の実施には概ね 1 時間～1 時間半を要する。DIVA の日本語版は、インターネット上に公開されており、無料で使用できる（http://divacenter.eu/Content/VertalingPDFs/DIVA_2_Japanese_FORM.pdf）。

2) ADHD の研究や臨床場面に CAARS、CAADID、DIVA が使用される動向

これまでに刊行されている学術論文数を探索的に知るために、アメリカ国立医学図書館の国立生物工学情報センター（NCBI）が運営する医学・生物学分野の学術文献検索サービス PubMed（http:/www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed）を用いて、論文のタイトルに“ADHD AND adult”のキーワードを含む論文数を検索したところ、2019 年 4 月 30 日時点で 10733 本が該当した。1998 年には 122 本、2008 年には 468 本、2018 年には 615 本であり、1998 年から 20 年間で約 5 倍に増加していることが分かる。このうち、ASRS のキーワードを追加して検索したところ 230 本、CAARS では 150 本、CAADID では 24 本、DIVA では 19 本が該当し、CAARS が最も論文で使用されている尺度であると考えられる。

一方、邦文論文に限定し、日本の国立情報学研究所学術情報ナビゲータ Cinii（https://ci.nii.ac.jp/）で論文のタイトルに“ADHD”のキーワードを含む論文数を検索したところ（2019 年 5 月 5 日）、2639 本が該当した。“ADHD&成人”で検索すると 145 本となり、成人期の ADHD に関する論文数はあまり多くはないことが分かる。このうち“ASRS”、“CAARS”、“CARDID”、“DIVA”のキーワードで該当する論文数は、それぞれ 3 本、3 本、0 本、0 本であった。上記の検索には該当しなかったものの、これらの尺度を使用した成人の ADHD に対する研究はわずかながらも増えてきつつある。近年、成人の ADHD に対する時間管理スキル習得に焦点化した認知行動療法が実施され、その効果が予備的に検討された（中島ら，2019）。対象は，20 歳以上 65 歳未満の ADHD 患者 8 名（平均年齢：39.80 歳，女性：男性＝7:1）であった。医療機関で ADHD の診断を受けており、研究チームによって CARDID を用いて ADHD と診断された。介入プログラムは，ADHD 患者の時間管理で困難を抱える 6 つの生活場面から構成されており，1 回 90 分間計 8 回行われた。参加者とその家族に対して，プログラム開始前（T1），終了後（T2），終了 2 ヶ月後（T3）の 3 時点で，質問紙への回答を求め

た。本人評価では，CAARS の不注意／記憶症状，衝動性／情緒不安定，DSM-IV 不注意症状，DSM-IV 総合 ADHD 症状において，T1 から T2 時点および T3 時点で有意な改善が見られ，T3 時点には臨床域以下に達していた。家族評価では，不注意／記憶症状においてのみ，T1-T3 間で有意な差が見られた。介入プログラムの自覚的・他覚的な効果が示され，治療効果を認識する時期および症状について本人と家族間に差異のあることが示唆された。英語論文では、介入の効果検討の研究に、CARDID、DIVA などを用いて研究参加者を診断し、症状の変化についての指標の 1 つに CAARS を使用するのは一般的であるが、我が国ではようやく端緒についた段階であると考えられ、今後の普及が望まれる。

D．考察

CAARS、CARDID、DIVA をはじめとする成人の ADHD をアセスメントするツールの使用状況は、欧米と比して遅れていることが明らかになった。しかしながら、グローバルスタンダードである成人の ADHD の診断・評価尺度について、最近 10 年の間に、我が国でも翻訳および標準化作業がようやくほぼ完了し、ようやく欧米と同等のアセスメントが実施できる段階となっている。今後の課題として、成人の ADHD のアセスメントに対する正しい理解およびスキルの習得を促すような研修体制の整備が急務である。

F．参考文献

Barkley, R. A. (1998). Attention deficit hyperactivity disorder: A handbook for diagnosis and treatment. 2nd ed. New York: Guilford Press.

Barkley, R. A. (2002). Major life activity and health outcomes associated with attention deficit/hyperactivity disorder. Journal of Clinical Psychology, 63, 10-15.

Biederman, J., Mick, E., & Faraone, S, V. (2000). Age-dependent decline of symptoms of attention deficit hyperactivity disorder: Impact of remission definition and symptom type. American Journal of Psychiatry, 157, 816-818.

Conners, C. K., Erhardt, D., & Sparrow, E. (1999). CAARS. Adult ADHD Rating Scales. Technical Manual. Toronto: Multi-Health Systems.

DIVA2.0 （2019 年 5 月 5 日） http://divacenter.eu/Content/VertalingPDFs/DIVA_2_Japanese_FORM.pdf

Kessler, R. C., Adler, L., Barkley, R., Biederman, J., Conners, C., Delmer, O., Faraone, S., Greenhill, L., Howes, M., Secnik, K., Spencer, T., Ustun, T., Walters, E., & Zaslavsky, A. (2006). The prevalence and correlates of adult ADHD in the United States: Result from the national comorbidity survey replication. American Journal of Psychiatry, 164, 716-723.

中島美鈴・稲田尚子・谷川芳江・山下雅子・前田エミ・高口恵美・矢野宏之・猪狩圭介・久我弘典・織部直弥・要斉・原田剛志・上野雄文・皿田洋子・黒木俊秀（2019）成人注意欠如・多動症の時間管理に焦点を当てた集団認知行動療法の効果の予備的検討.発達心理学研究, 30, 23-33.

中村和彦（監修），染木史緒・大西将史（監訳）(2012a). CAADIDTM 日本語版．金子書房.

内山敏・大西将史・中村和彦・竹林淳和・二宮貴至・鈴木勝昭・辻井正次・森則夫 (2012). 日本における成人期 ADHD の疫学調査―成人期 ADHD の有業率について―．子どものこころと脳の発達，3，34-42.